

張遷碑

後漢

中国法書選 9

張遷碑

後漢

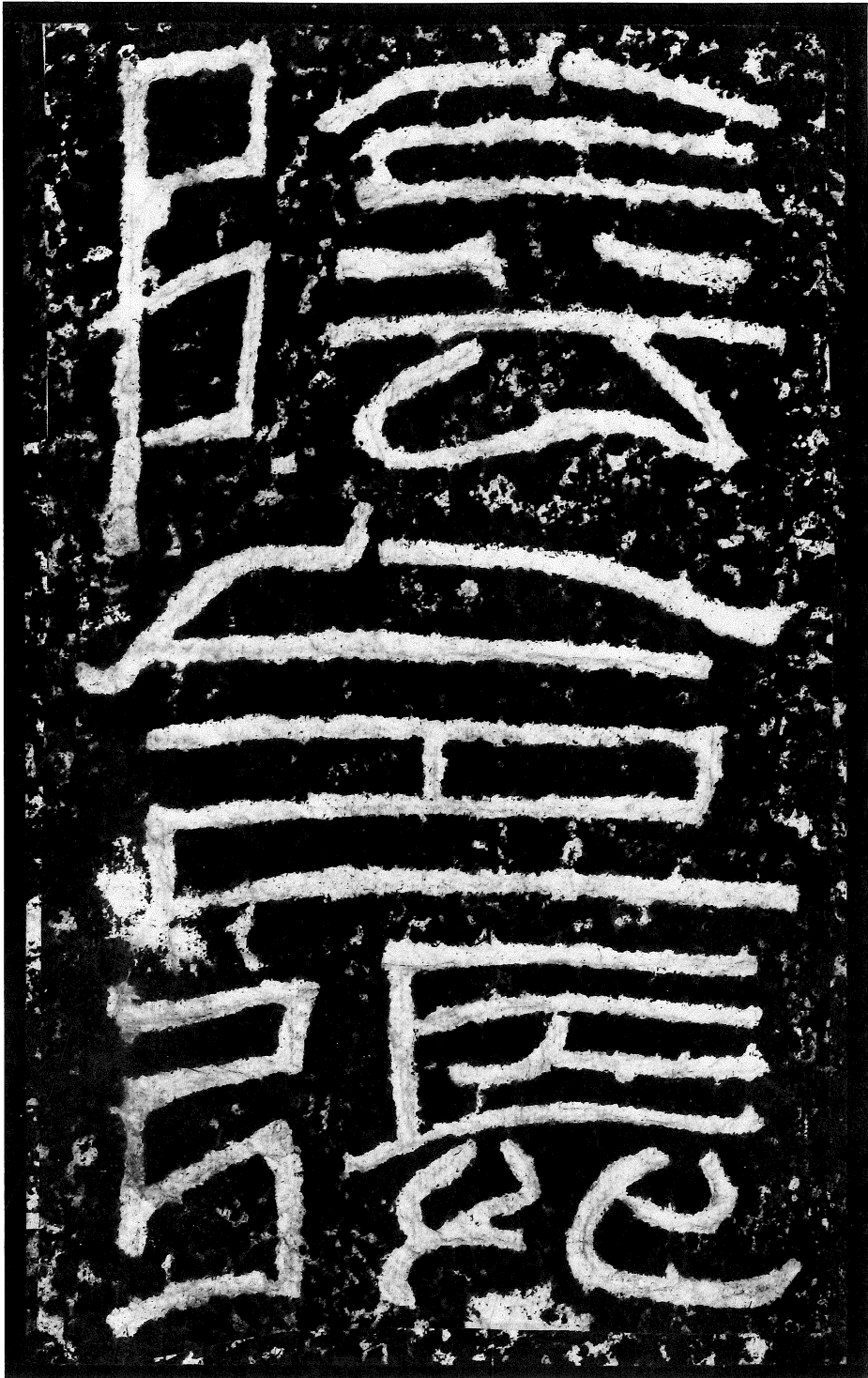
二玄社



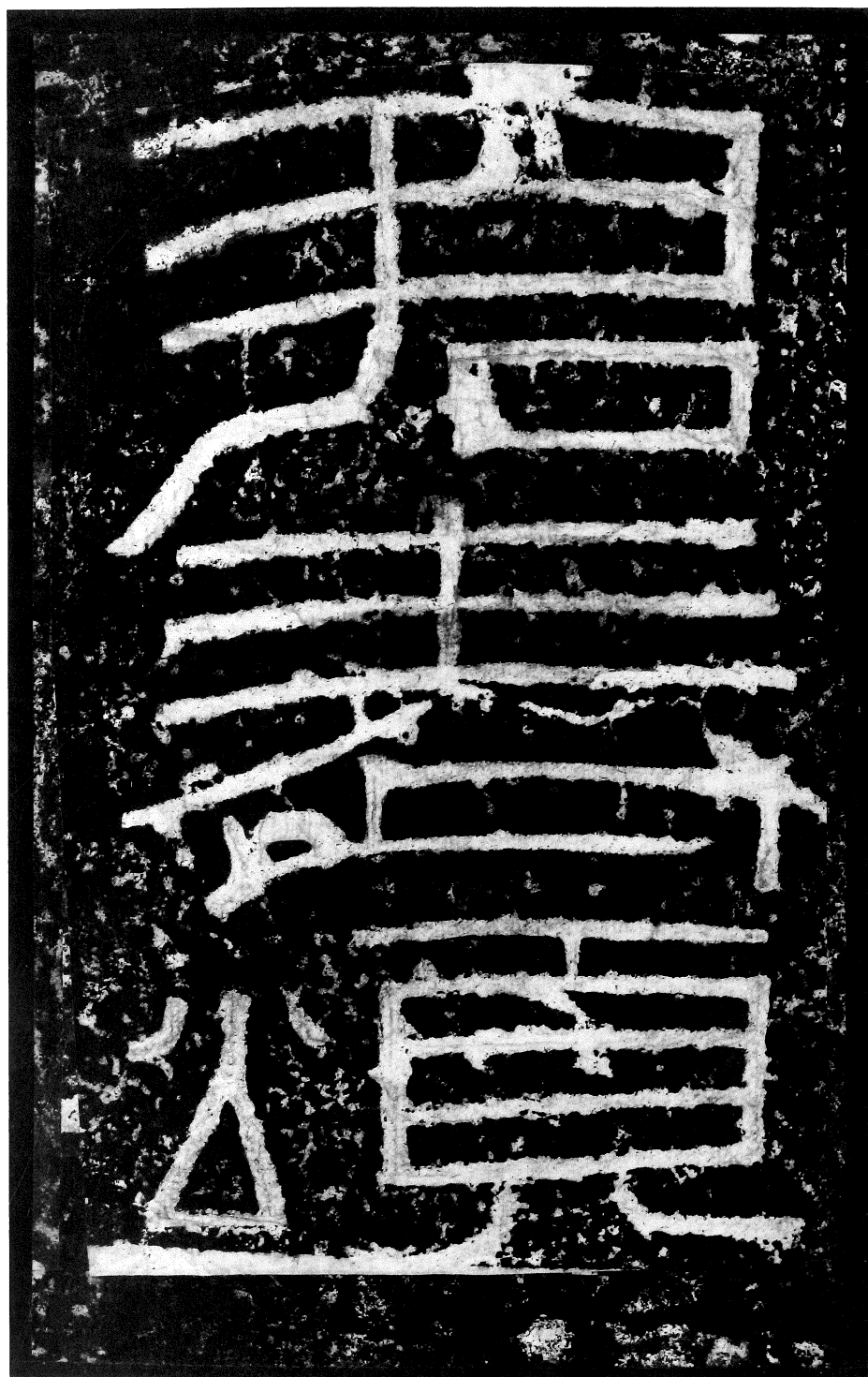
漢故穀



城長蕩



陰令張



君表頌。



君諱遷字公方。陳留己吾人也。君之先出自有。
君諱は遷字は公方、陳留己吾の人なり。君の先は有(周)より出づ。

有 近拓中

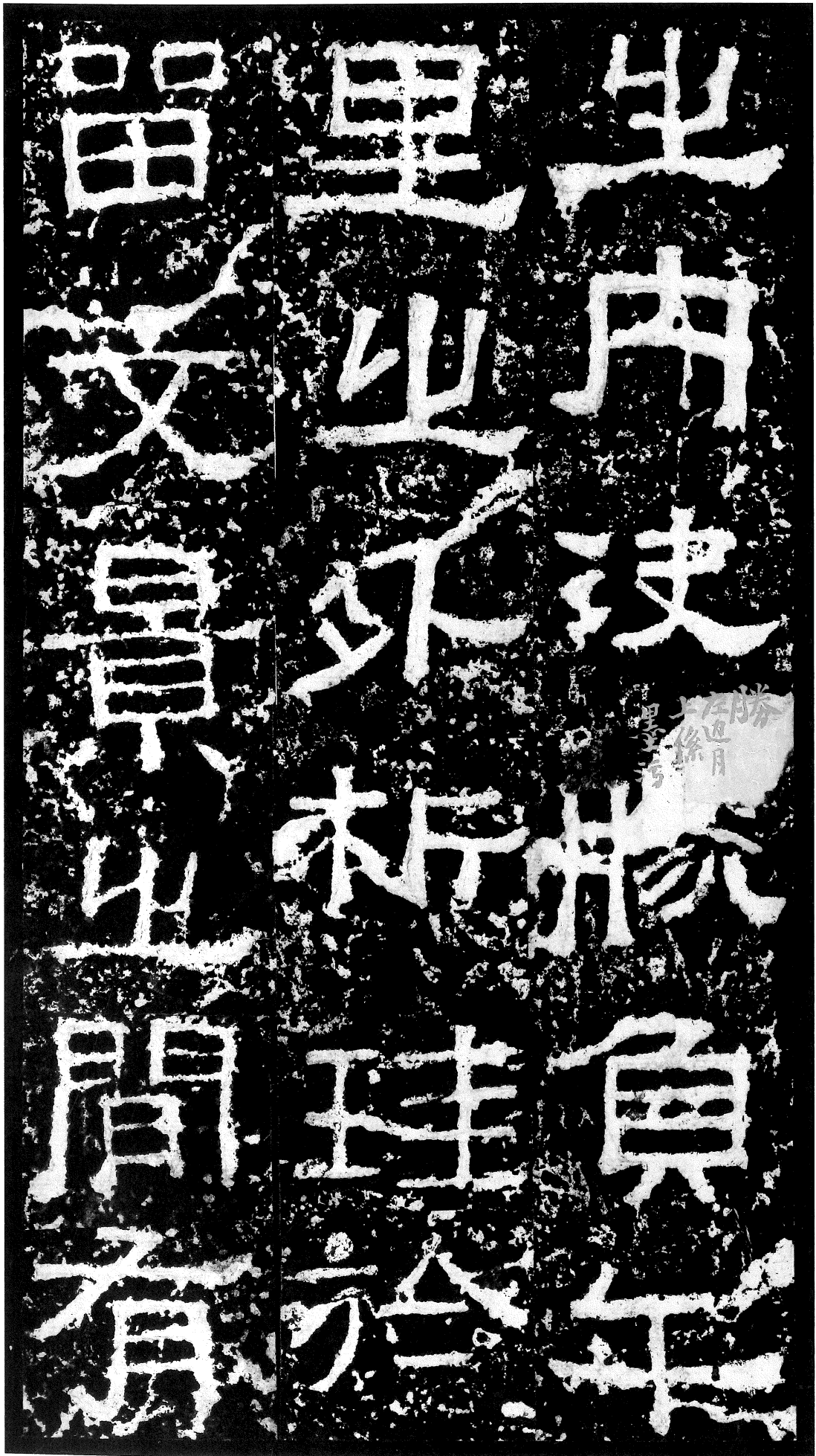


周。周宣王中興。有張仲。以孝友爲行。披覽詩雅。
 周の宣王 中興し、張仲有り。孝友を以て行ないと爲す。詩雅を披覽せば、



煥知其祖。高帝龍興。有張良。善用籌策。在帷幕
煥として其の祖を知る。高帝龍興し、張良有り。善く籌策を用い、帷幕の内に在りて、

右半
 今已泐



之内。決勝負千里之外。析珪於留。文景之間。有
 勝負を千里の外に決し、珪を留に析かつ。文景の間、



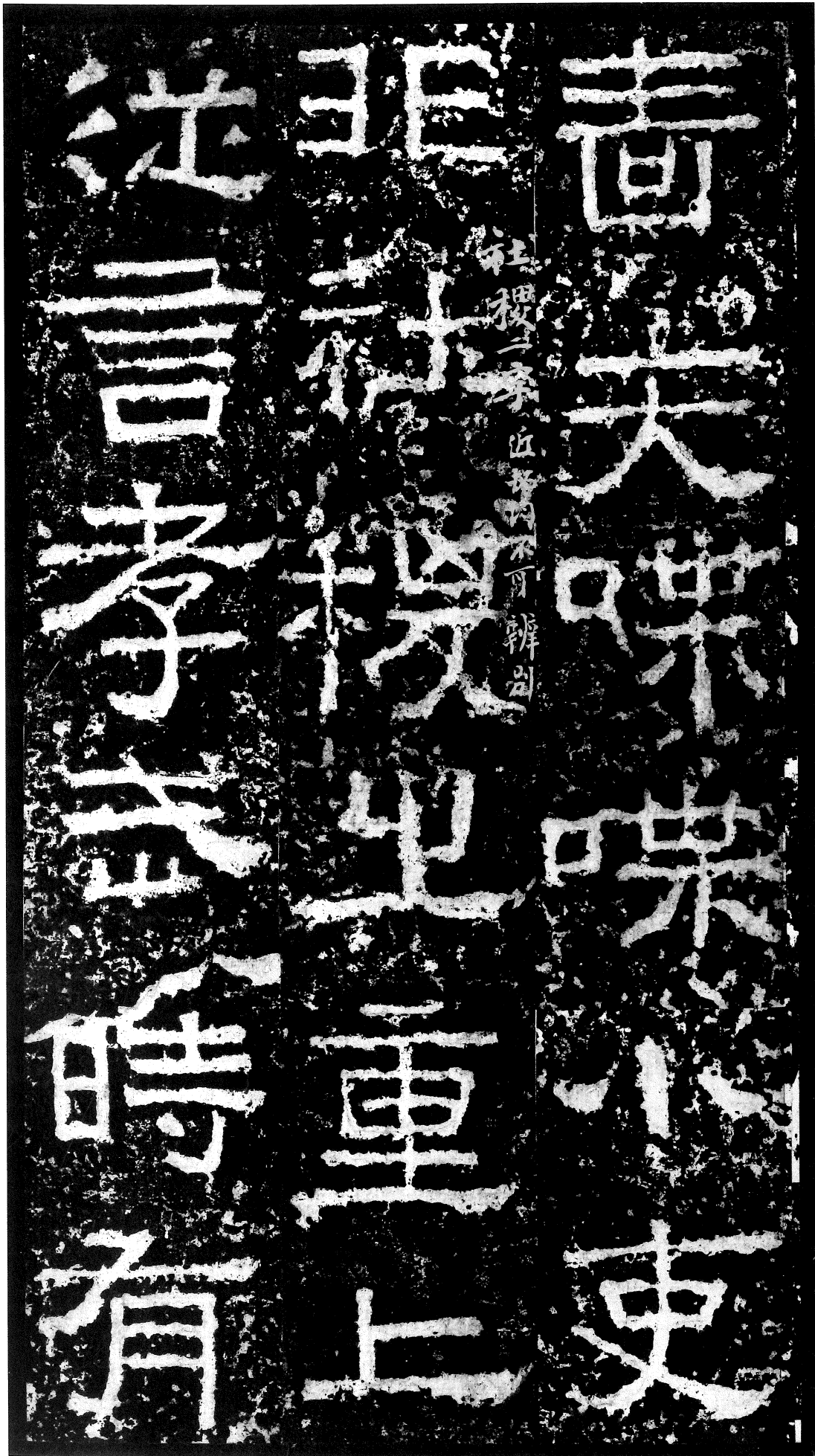
張釋之(有)。建忠弼之謨。帝遊上林。問禽狩所有。苑
 張釈之(有り)。忠弼の謨を建つ。帝上林に遊び、禽獣の有る所を問う。



令不對。更問嗇夫。嗇夫事對。於是進嗇夫為令。
 (施)令對えず。更に嗇夫に問う。嗇夫事對す。是に於いて嗇夫を進めて令と為し、



令退爲齋夫。釋之議爲不可。苑令有公卿之才。
 令は退けられて齋夫と爲る。釈之議して不可と爲す。苑令は公卿の才有り。



青夫喋喋小吏。非社稷之重。上從言。孝武時。有
 青夫は喋々（ささや）の小吏（せうじ）、社稷（しやく）の重きに非ずと。上（かみ）言（ことば）に從（したが）う。孝武（かうぶ）の時、



張騫。廣通風俗。開定畿寓。南苞八蠻。西羈六戎。
 張騫（有り）。広く風俗を通じ、畿宇を開き定め、南は八蛮を苞み、西は六戎を羈し、



北震五狄。東勤九夷。荒遠既殲。各貢所有。張是。
 北は五狄を震い、東は九夷を勤めしめ、荒遠既に殲し、各おの所有を貢す。張氏は(漢を輔け)、

張
 下半已助

震合已歷

五返拓承

東勤二字

近拓全失神



輔漢。世載其德。爰既且於君。蓋其纒繩。續戎鴻。
 世よ其の徳を載す。爰に君に暨ぶ、蓋し其の纒繩なり。戎いなる鴻(緒)を續ぎ、



緒。牧守相係。困殞高問。孝弟於家。中誓於朝。治
 牧守相い係ぎ、高問を殞とさず。家に孝弟に、朝に忠誓なり。



京氏易。聽麗權略。藝於從政。少為郡吏。隱練職。
京氏の易を(治め)、權略に聽麗に、從政に藝あり。少くして郡吏と為り、隱かに職(位)を練り、



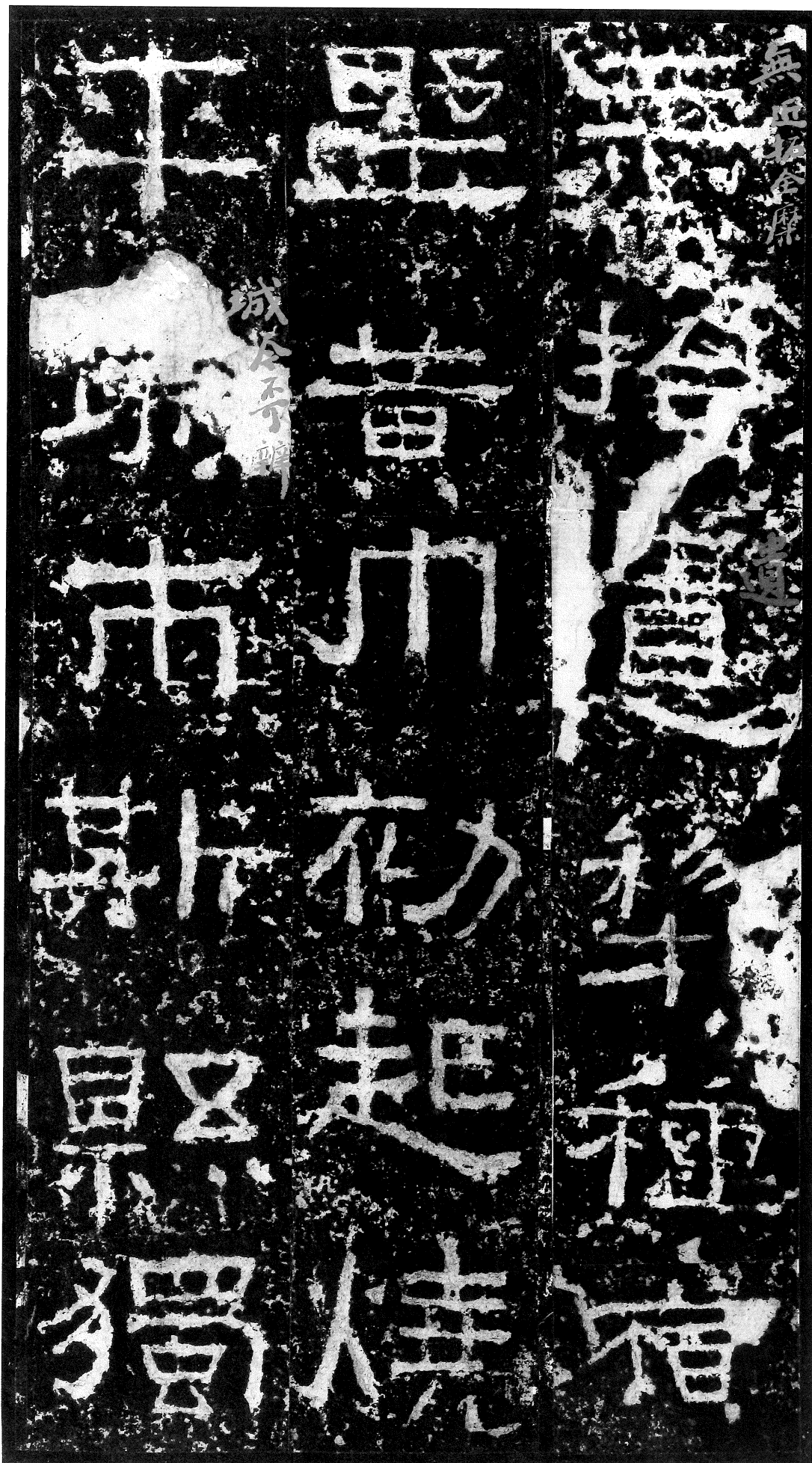
位。常在股肱。數爲從事。聲無細聞。徵拜郎中。除
 常に股肱たきに在り。數かずしば從事と爲り、声こゑに細聞さいぶん無し。徵めいせられて郎中らうちゆうを拜し、



穀城長。蜚月之務。不閉四門。臆正之僚。休囚歸。
穀城長に「除せらる」。蜚月の務め、四門を閉ざさず、臆正の際、囚を休めて帰り「賀せしむ」。



賀。八月圍民。不煩於鄉。隨就虛落。囹圄高囹。路
 八月に民を算するに、郷を煩わさず。隨いて虚落に就き、高年を存恤す。



無拾遺。犁種宿墜。黃巾初起。燒平國市。斯縣獨
 (路に)遺を拾う無く、犁種するに野に宿す。黄巾の初めて起こるや、城市を焼平するも、斯の県獨り(全し)。



全。子賤孔蔑。圍道區別。尚書五教。君崇其寬。詩
子賤・孔蔑、其の道は區別あり。尚書の五教、君は其の寬を崇ぶ。



云愷梯君隆五字近拓全原不可辨別

東

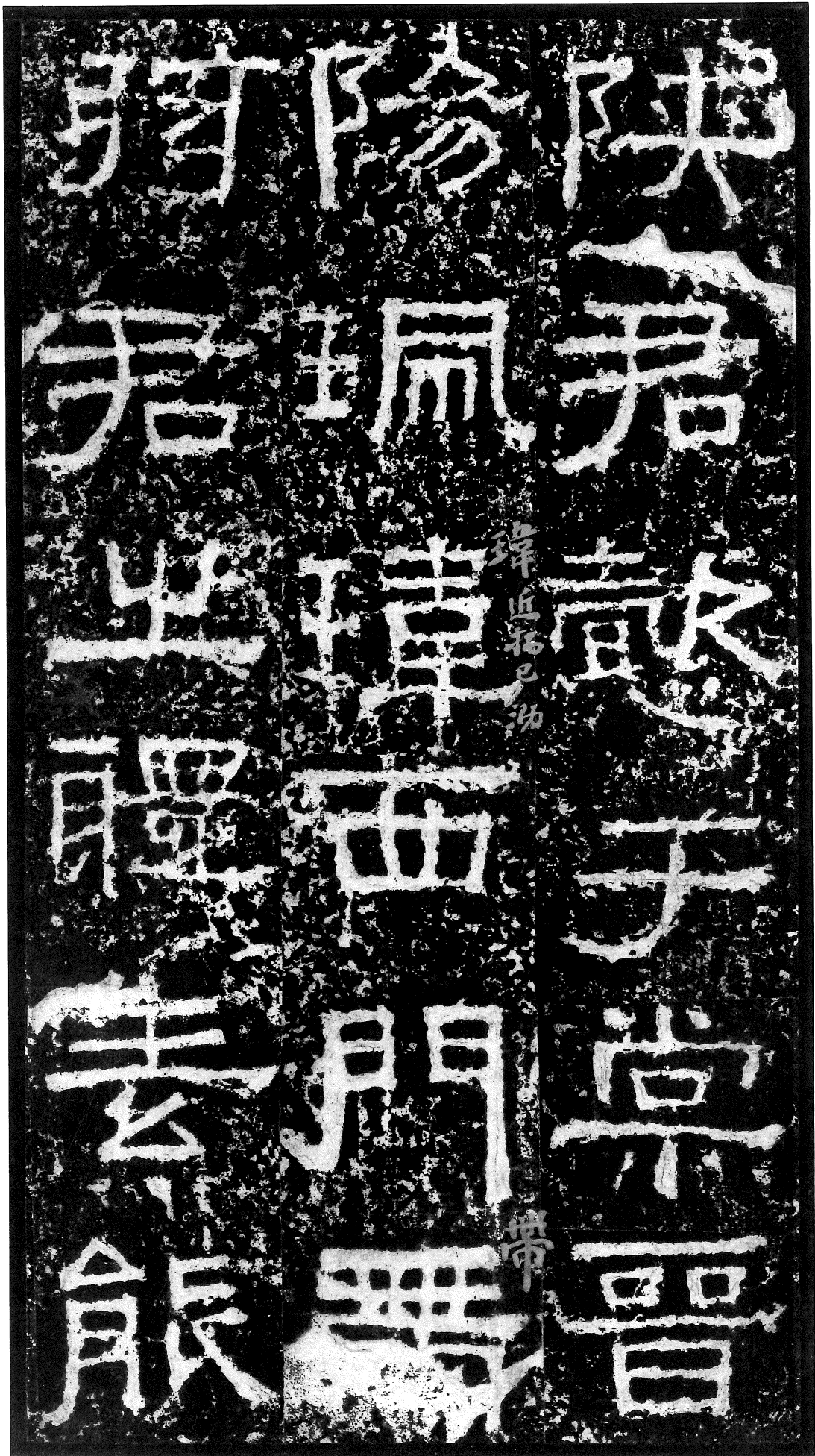
里

隱
有末
一畫
可尋

潤

色

云愷梯。君隆其園。東里潤色。園垂其仁。邵伯分
 (詩に愷梯と云い、君は其の園を隆くす。東里の潤色、君は其の仁を垂る。邵伯(陝を)分ち、



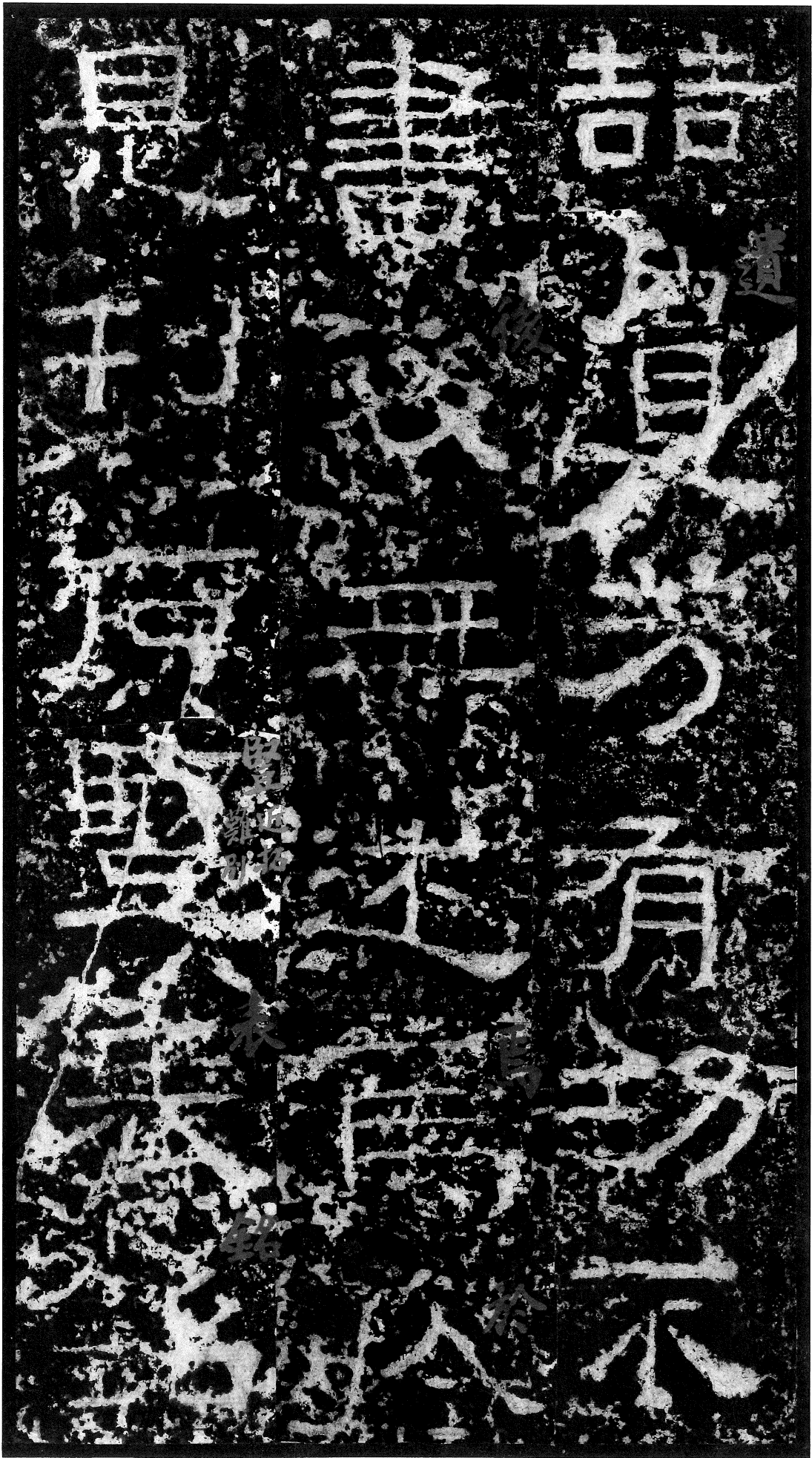
陝。君懿于棠。晉陽珮璋。西門帶弦。君之體素。能君は棠に懿なり。晉陽は璋を珮し、西門は弦を帶ぶ。君の體素、能



雙其助。流^八八基。遷^國陰^命。吏^民頡^頤。隨送如
 (能く)其の助を双べ、化を八基に流す。蕩陰令に遷るに、吏民頡頤し、隨送するは(雲の)如し。



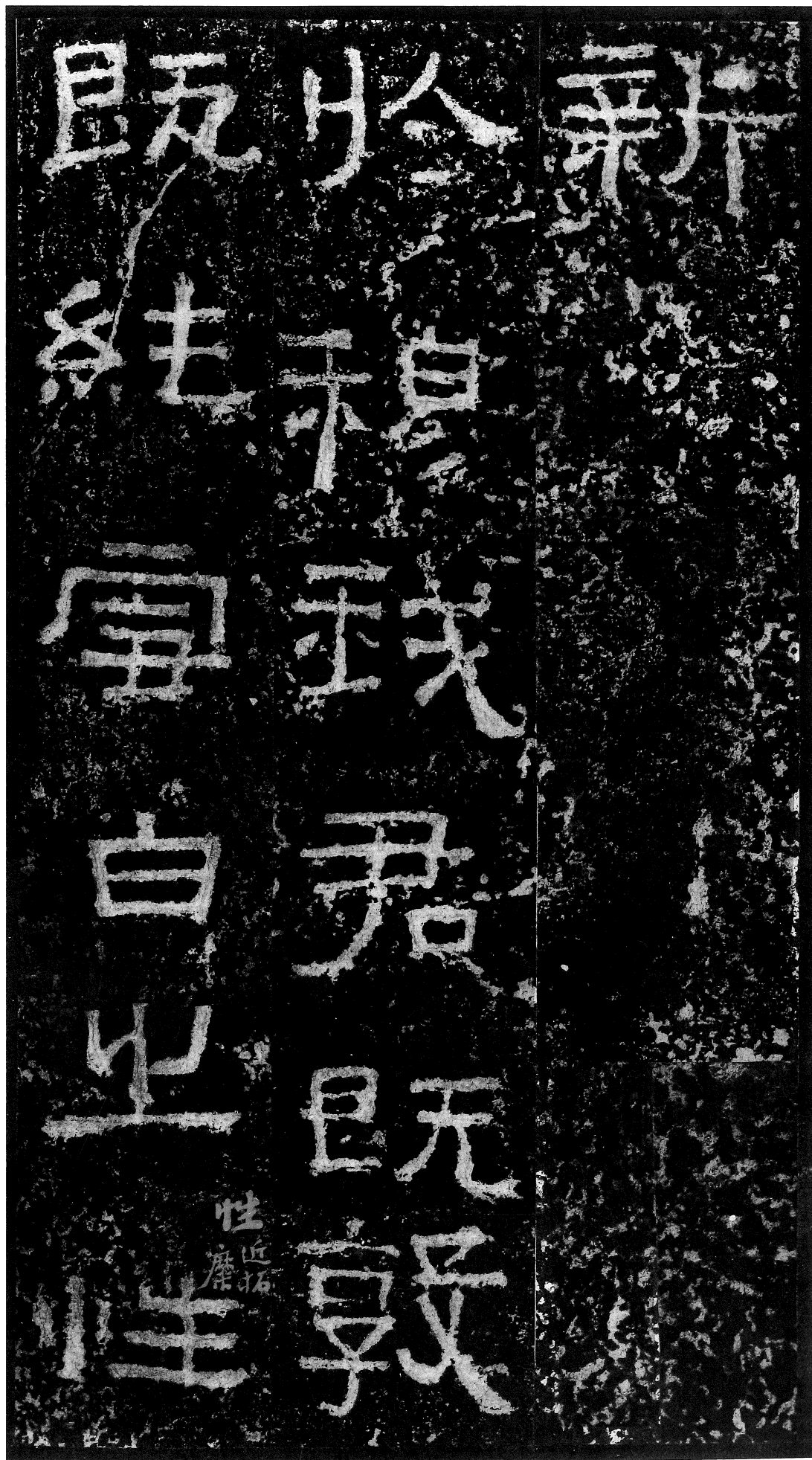
雲。周公東征。西人怨思。奚斯讚魯。考父頌殷。前
 周公東征すれば、西人怨思し、奚斯魯を讚し、考父殷を頌す。



昔遺芳。有功不書。後無述焉。於是刊石豎表。銘
 (前) 哲の遺芳、功有りて書せざれば、後に焉を述ぶる無し。是に於いて石に刊し表を豎て、



勒萬載。三代以來。雖遠猶近。詩云舊國。其命惟
 萬載（銘）勒す。三代以來、遠しと雖も猶お近し。詩に云う旧国、其の命（惟）惟れ（新たなり）と。



新。於穆我君。既敦既純。雪白之性。
 於穆^於我^我君^君、既^既敦^敦既^既純^純。雪^雪白^白之^之性^性、



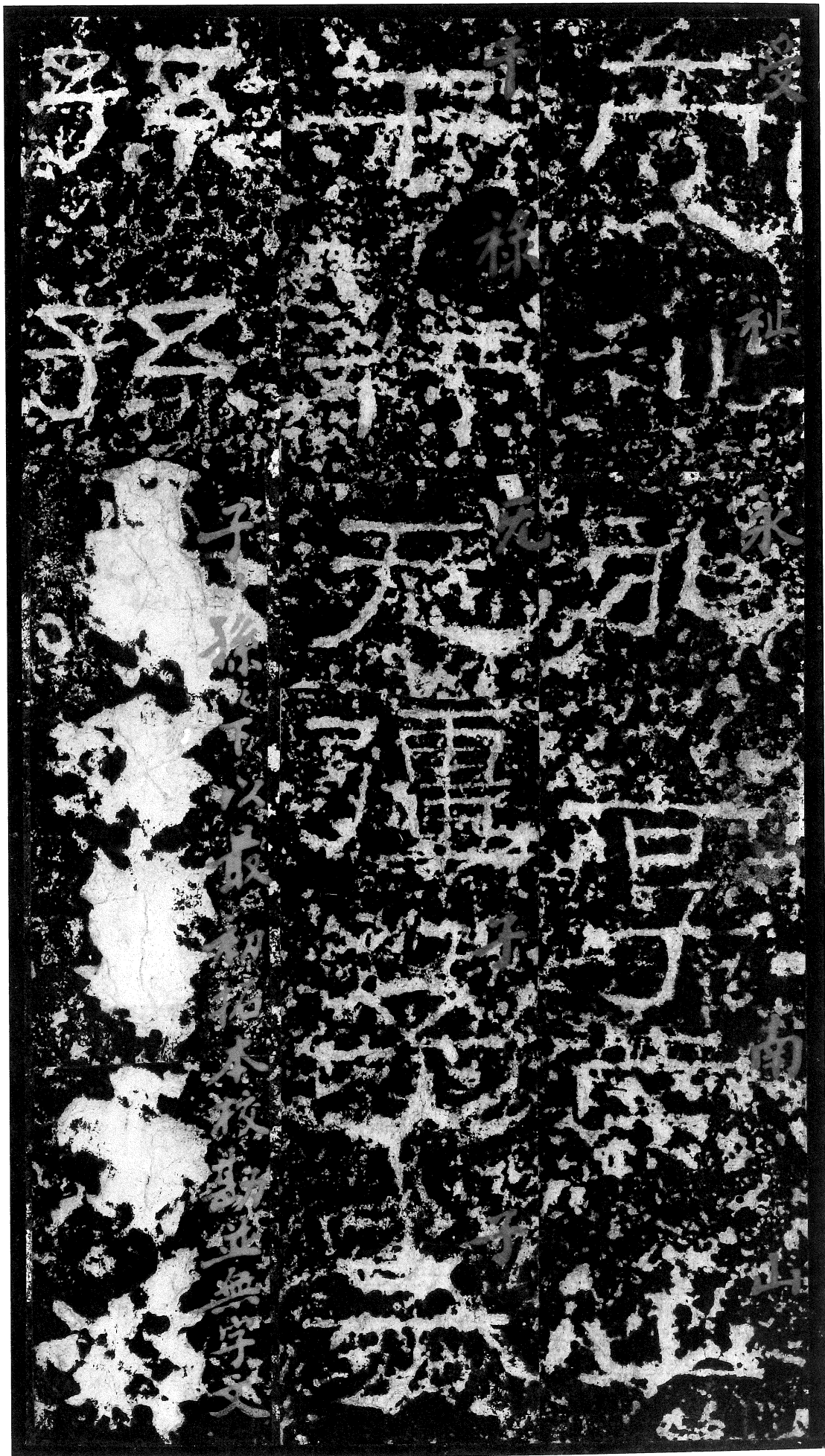
孝友之仁。紀行采本。蘭生有芬。克岐有兆。
綏御
 孝友の仁、行を紀すは本を采る。蘭生じて芬有り、克岐兆有り。綏御（助有り）、



有勛。利器不覿。魚不出淵。國之良幹。垂愛在民。
 利器、覿さず、魚は淵を出でず。國の良幹、愛を垂るは民に在り。



蔽沛棠樹。溫溫恭人。乾道不繆。唯淑是親。既多
 蔽沛たる棠樹。温々たる恭人。乾道繆らず、唯だ淑のみ是れ親しむ。既に多く〔祉を受け〕、



受嗣。永享圍山。干祿无疆。子子孫孫。
 永く南山を享く、干祿（干祿）疆り无く、子々孫々（表）。



表。 惟中平三年。 歲在攝
 惟うに 中平三年、歲は撰(提)に在り。



提。二月震節。紀日。上旬。陽氣厥析。感思舊君。故
 二月震節、紀日。上旬、陽氣に厥れ析かる。旧君を感思し、



吏韋萌等。僉然同聲。質師孫興。刊石立表。以示
〔故〕吏韋萌等、僉然と声を同じくす。師孫興を質い、石に刊して表を立て、以て〔後昆に〕示す。



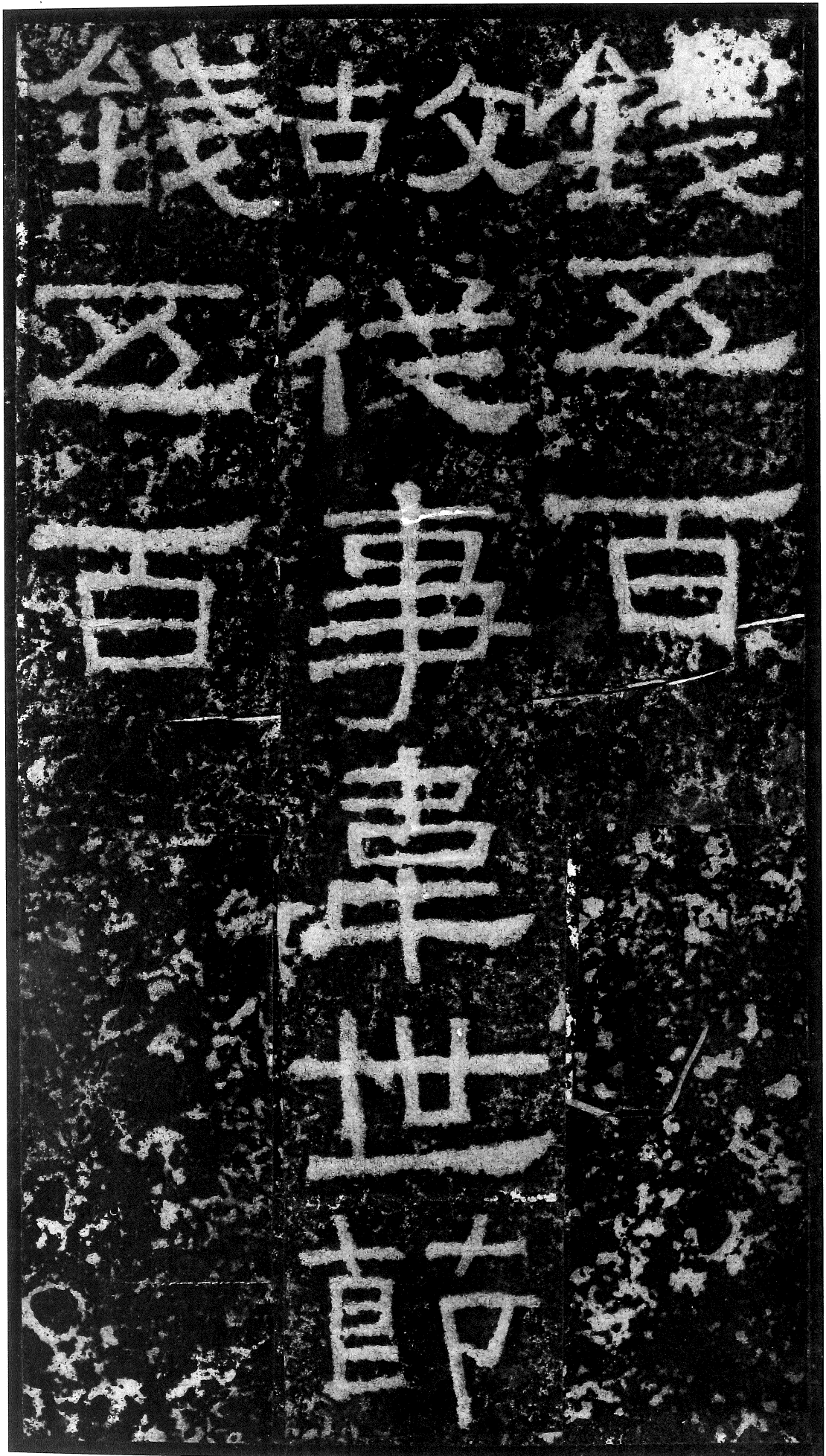
後昆。共享天祚。億載萬年。
 共トクニ天祚テンソクを享ウケけ、億載億載萬年萬年なれ。
 故安國長・章叔（珍）。



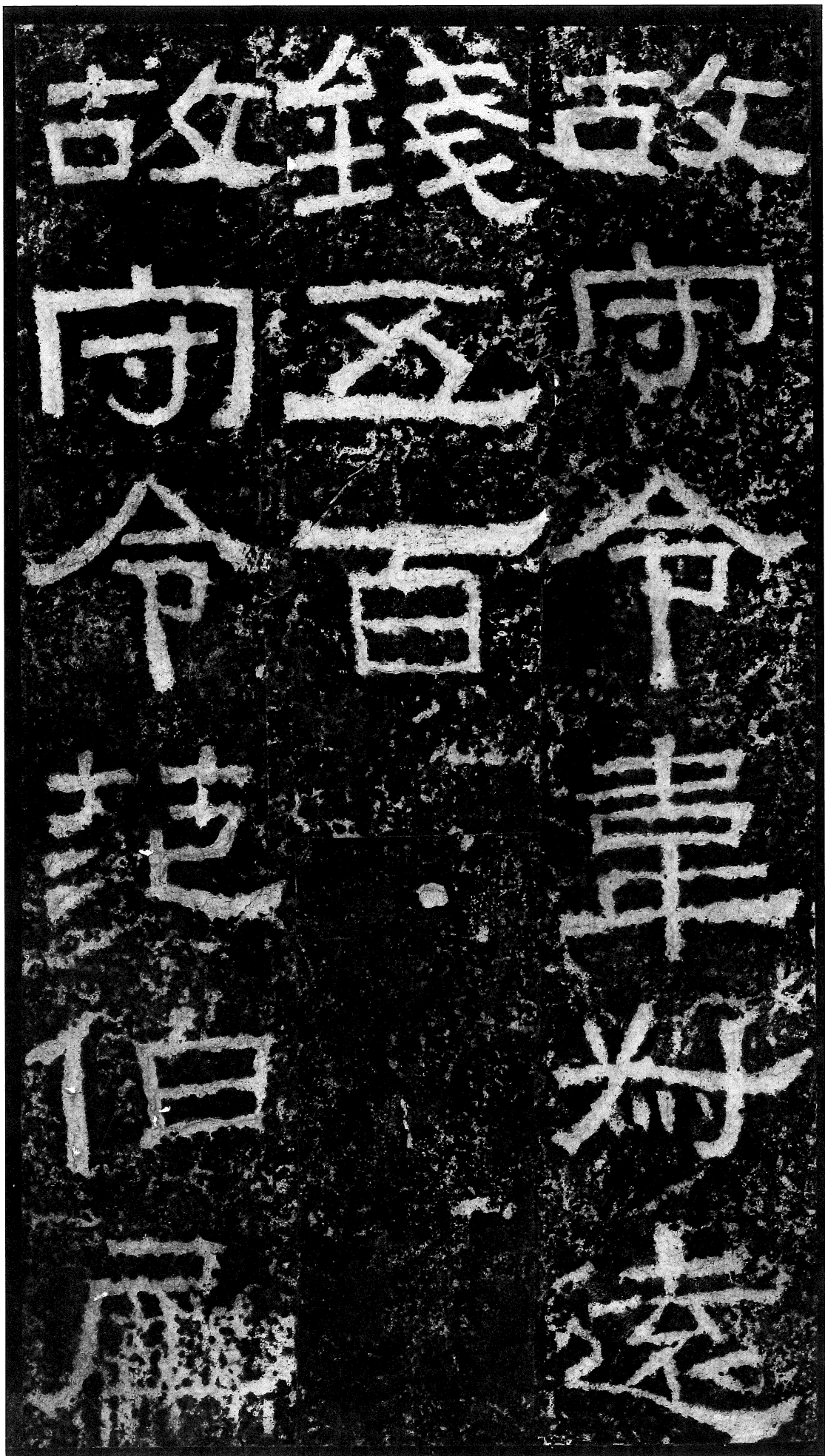
珍錢五百。𠄎從事。𠄎𠄎。錢五百。
 錢五百。故從事。韋𠄎。錢五百。



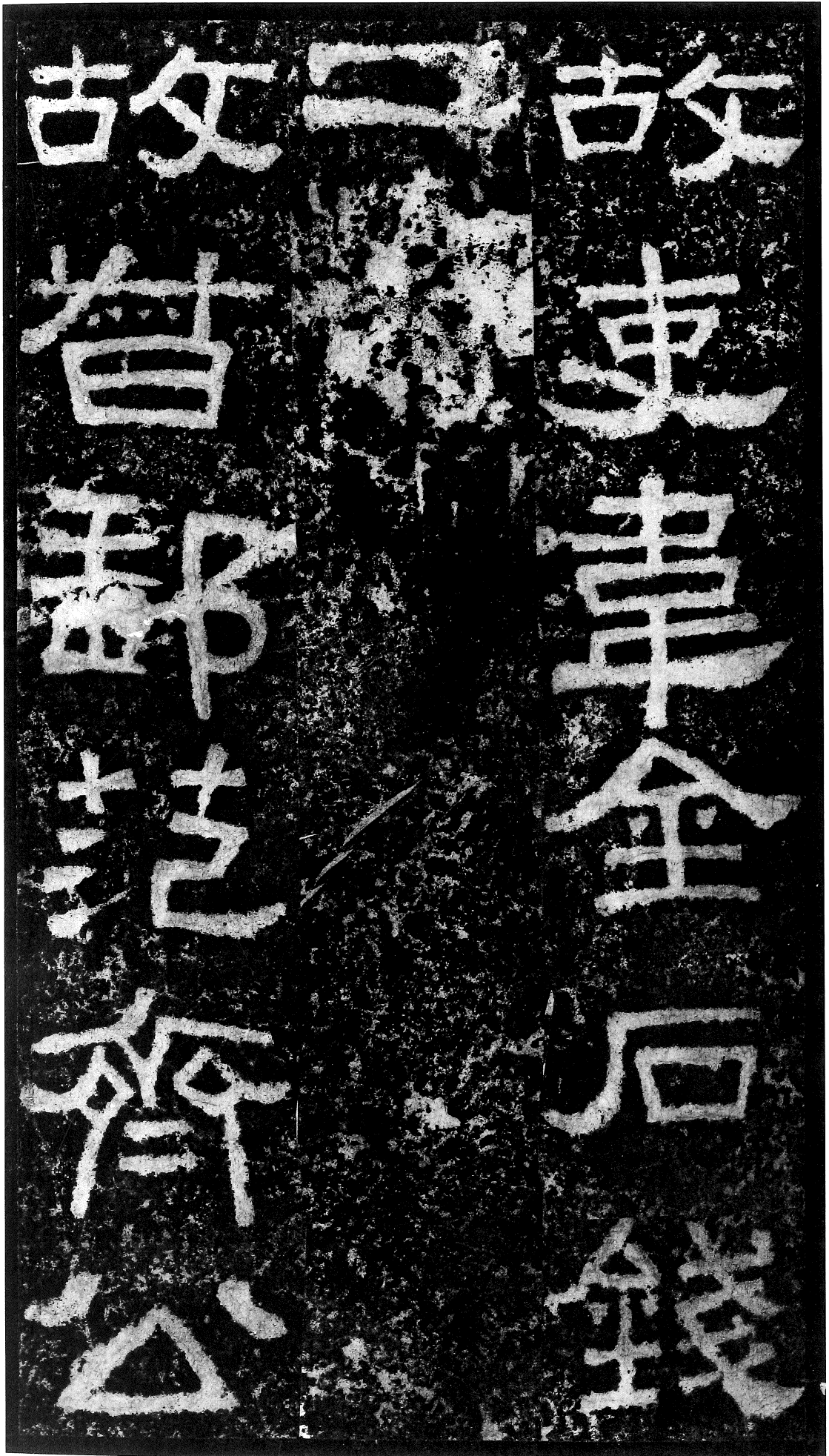
故從事韋元雅錢五百。故從事韋元景。
 故從事·韋元雅·錢五百。故從事·韋元景·



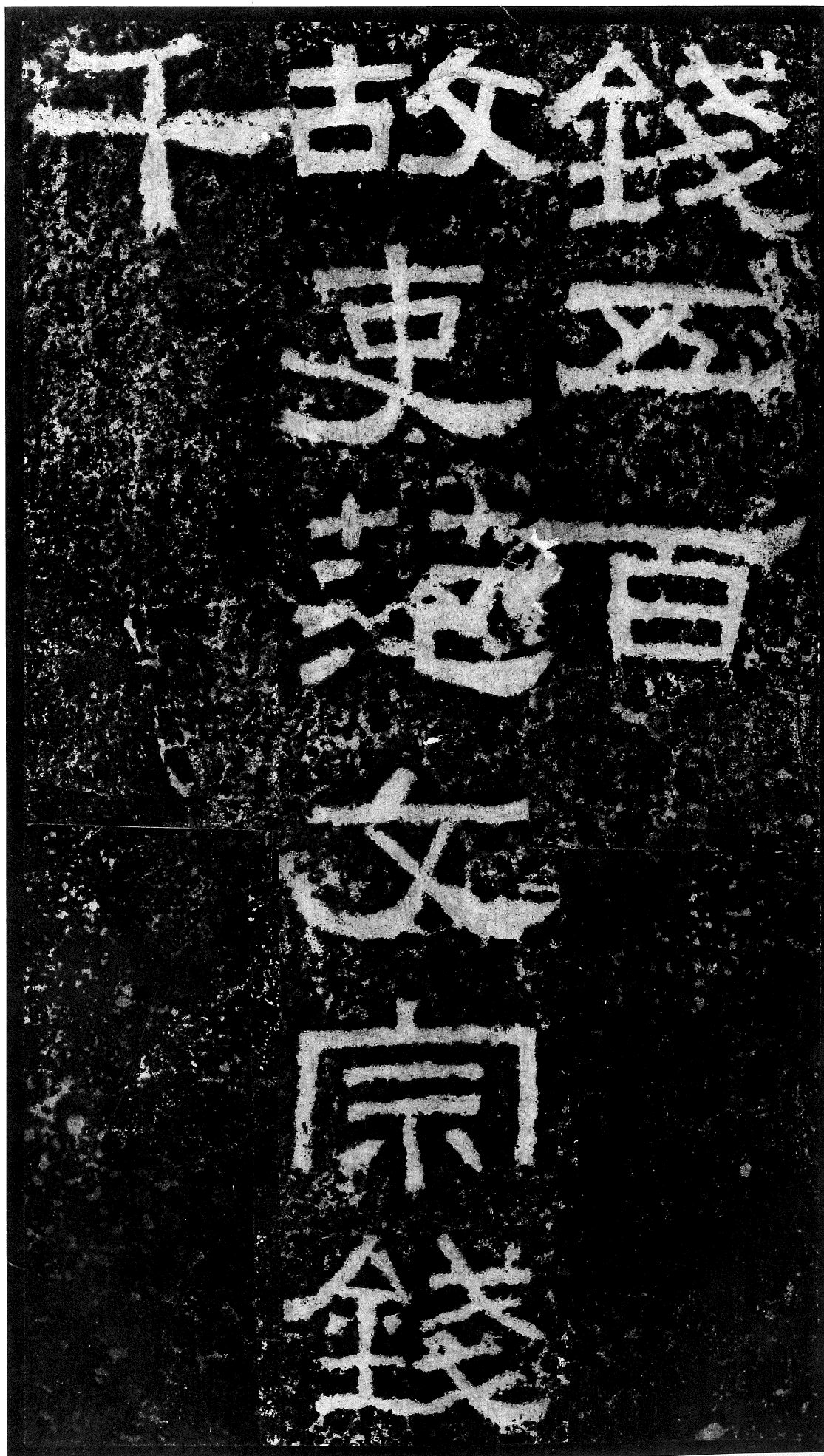
錢五百。故從事韋世節錢五百。
錢五百。故從事·韋世節·錢五百。



故守令韋叔遠錢五百。故守令范伯犀。
 故守令·韋叔遠·錢五百。故守令·范伯犀。



故吏韋金石錢二。故督郵范齊公。
 故吏·韋金石·錢二。故督郵·范齊公。



錢五百。故吏范文宗錢千。



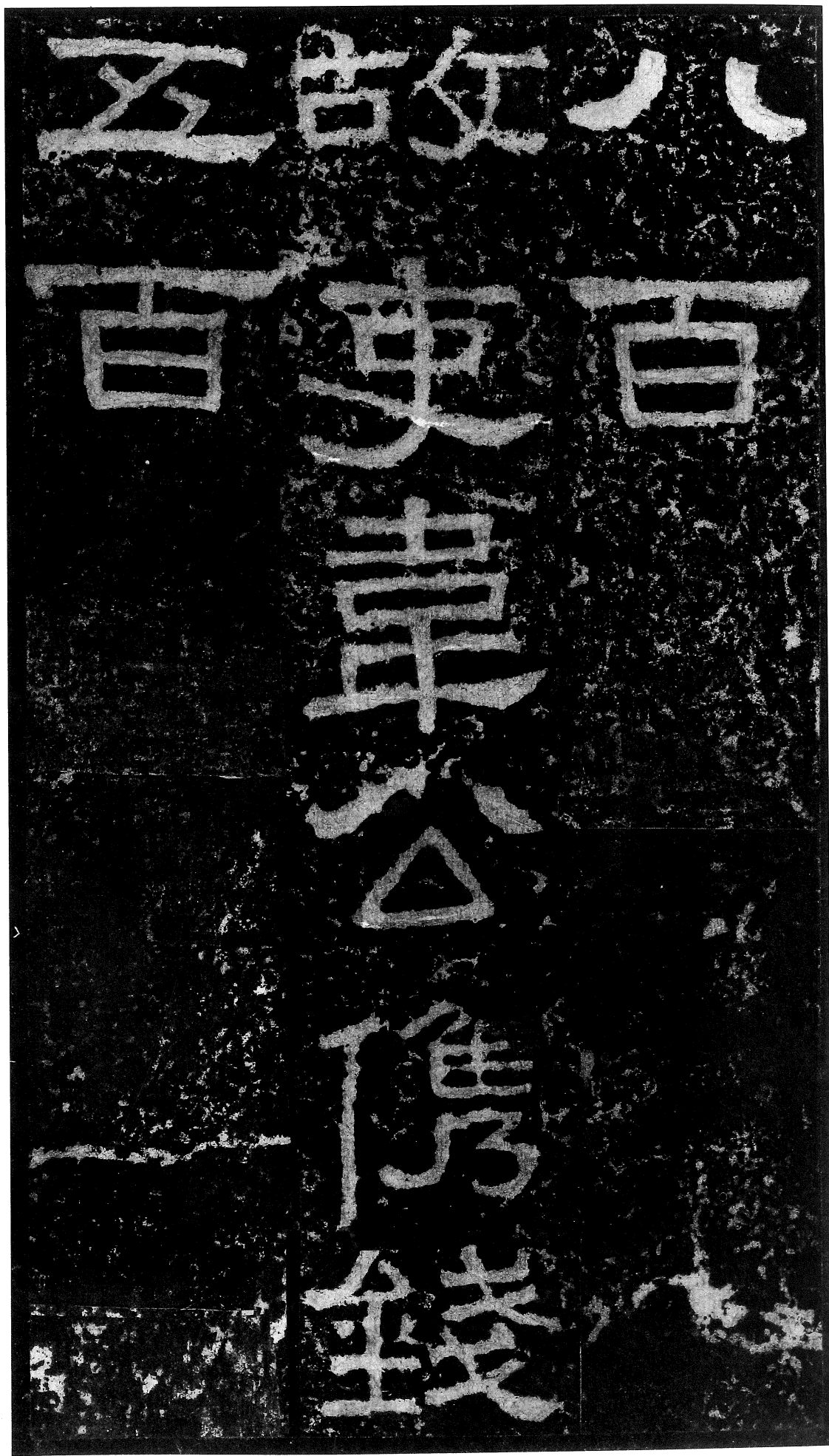
故吏范世節錢八百。故吏章府卿錢
 故吏·范世節·錢八百。故吏·章府卿·錢(七百)。



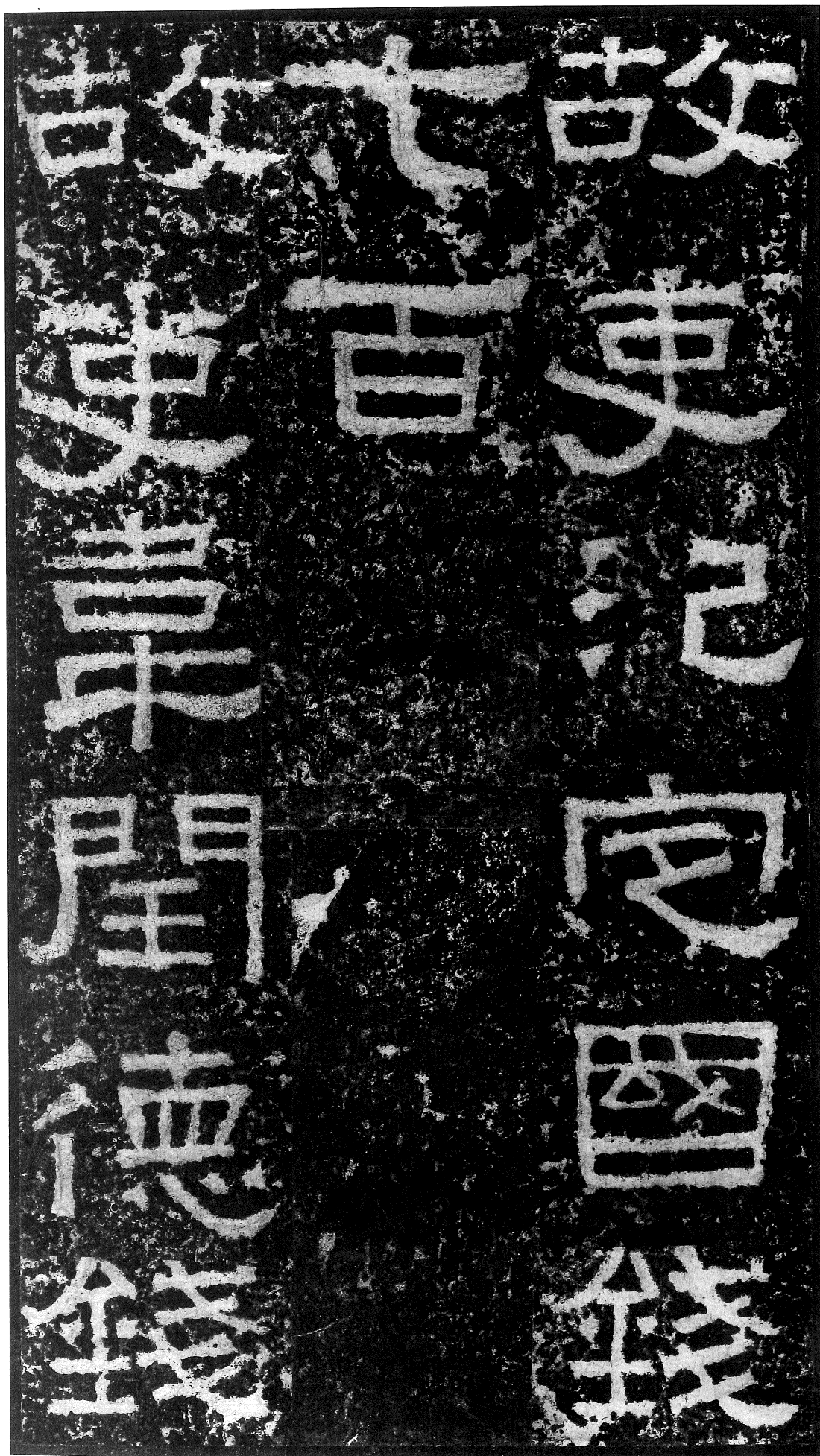
七百。故吏范季考錢七百。
 故吏·范季考·錢七百。



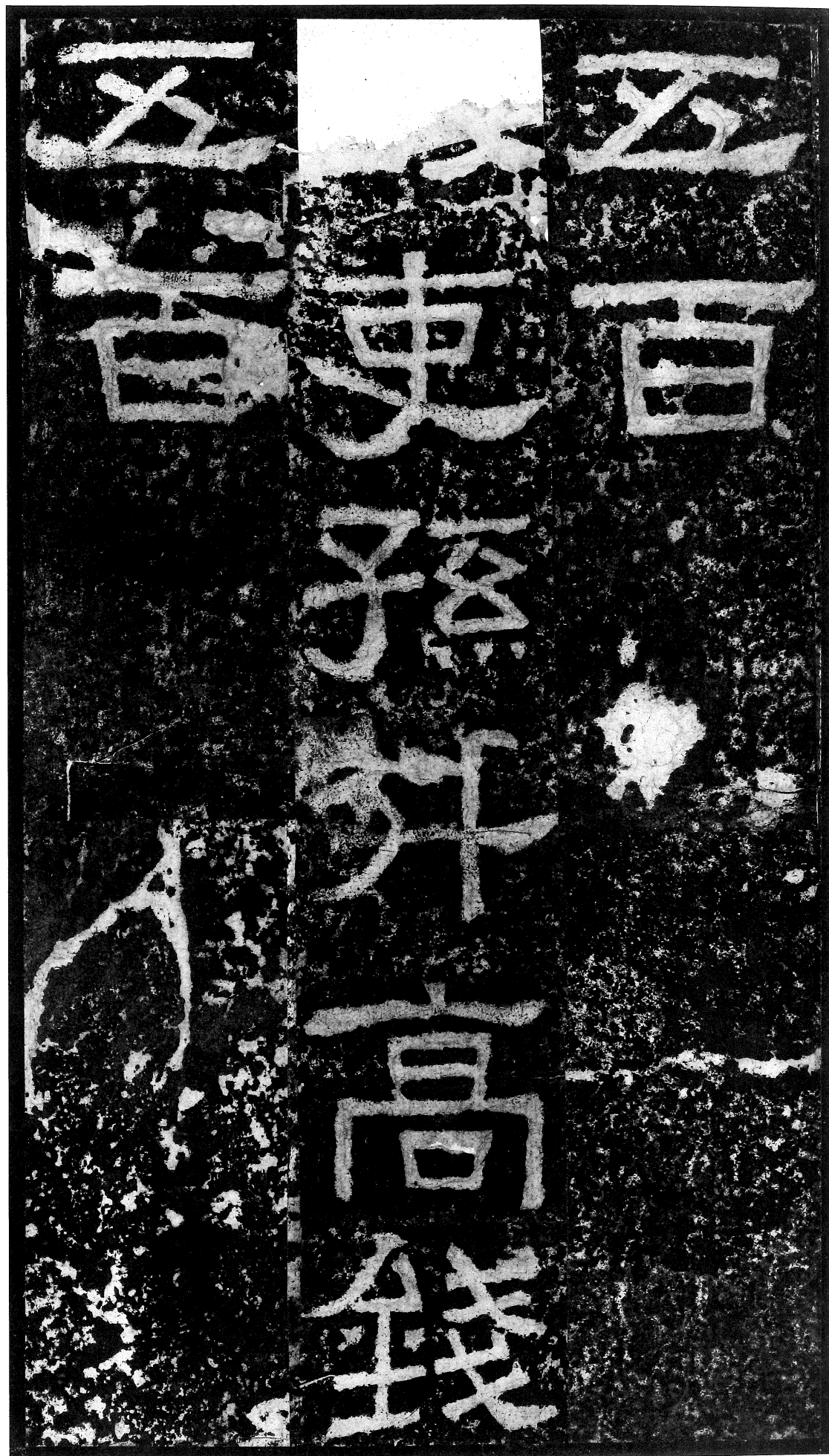
故吏韋伯臺錢八百。故吏范德寶錢
 故吏·韋伯台·錢八百。故吏·范德寶·錢(八百)。



八百。故吏韋公僂錢五百。
 故吏·韋公僂·錢五百。



故吏范定國錢七百。故吏韋閏德錢
 故吏·范定國·錢七百。故吏·韋閏德·錢(五百)。



五百。國史孫升高錢五百。
 故吏·孫升高·錢五百。



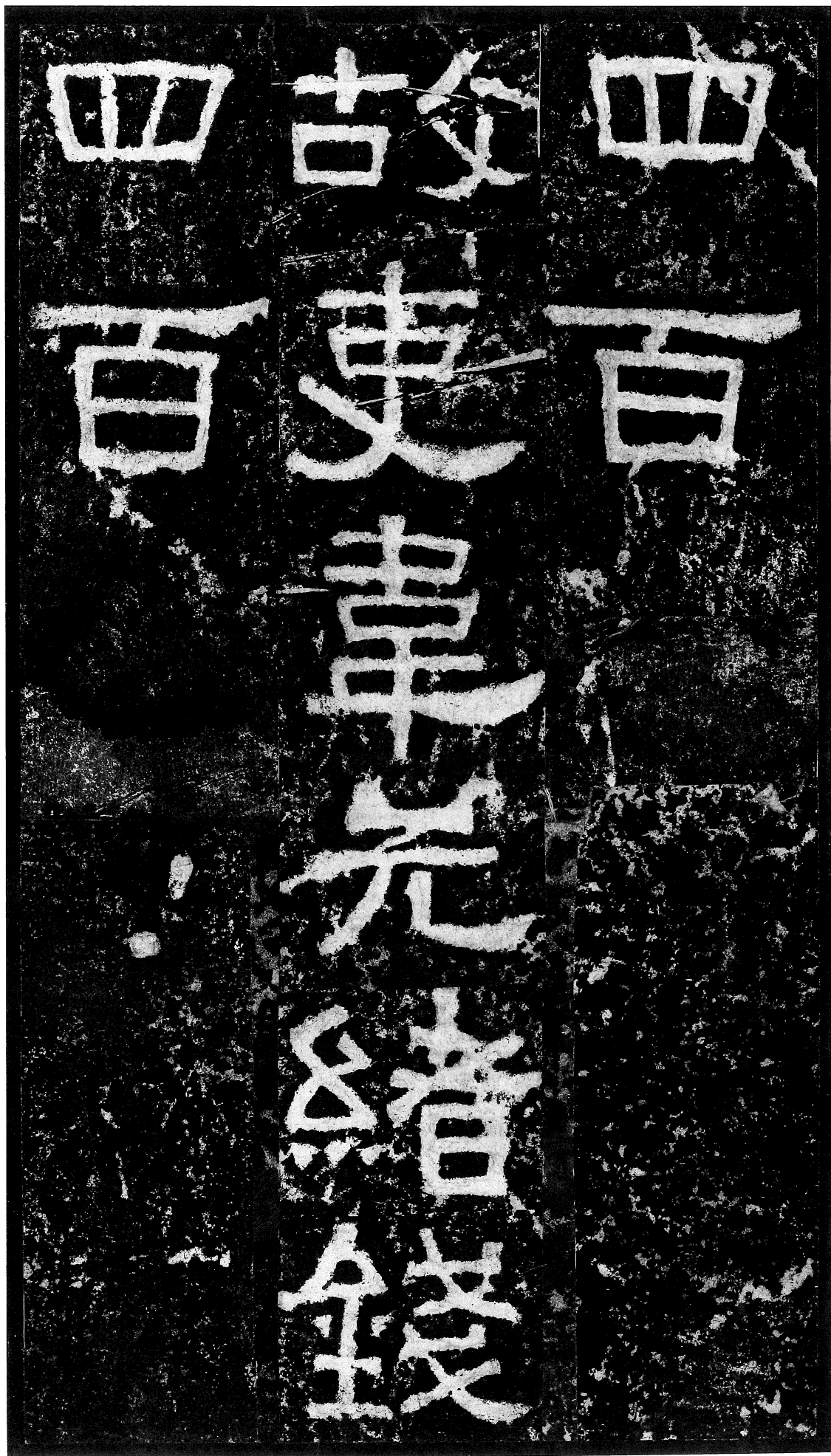
故吏韋公連錢七百。故吏韋排山錢
 故吏·韋公連·錢七百。故吏·韋排山·錢(四百)。



四百。故吏范巨錢四百。
 故吏·范巨·錢四百。



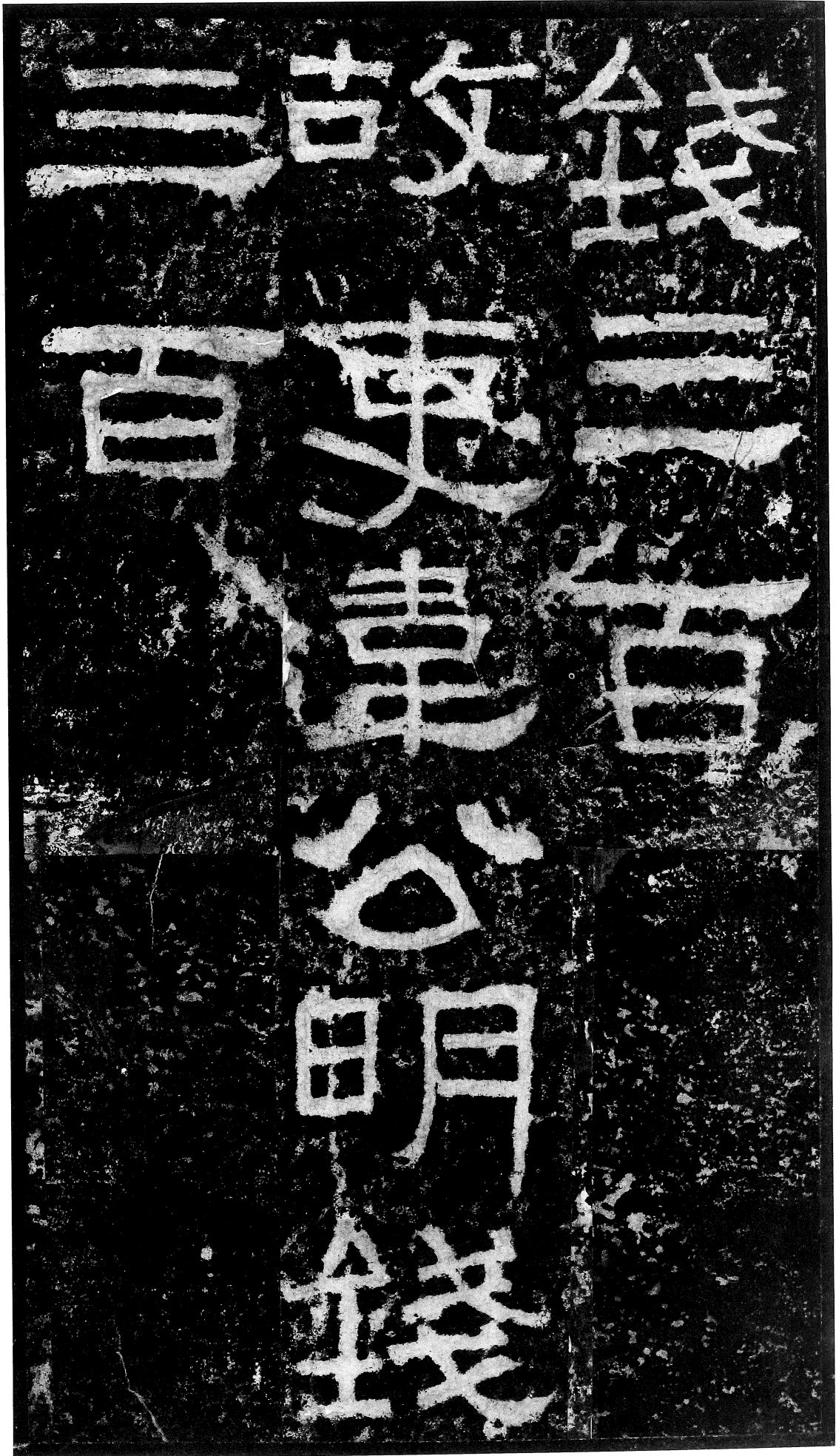
故吏韋義才錢四百。故吏韋輔節錢
 故吏·韋義才·錢四百。故吏·韋輔節·錢(四百)。



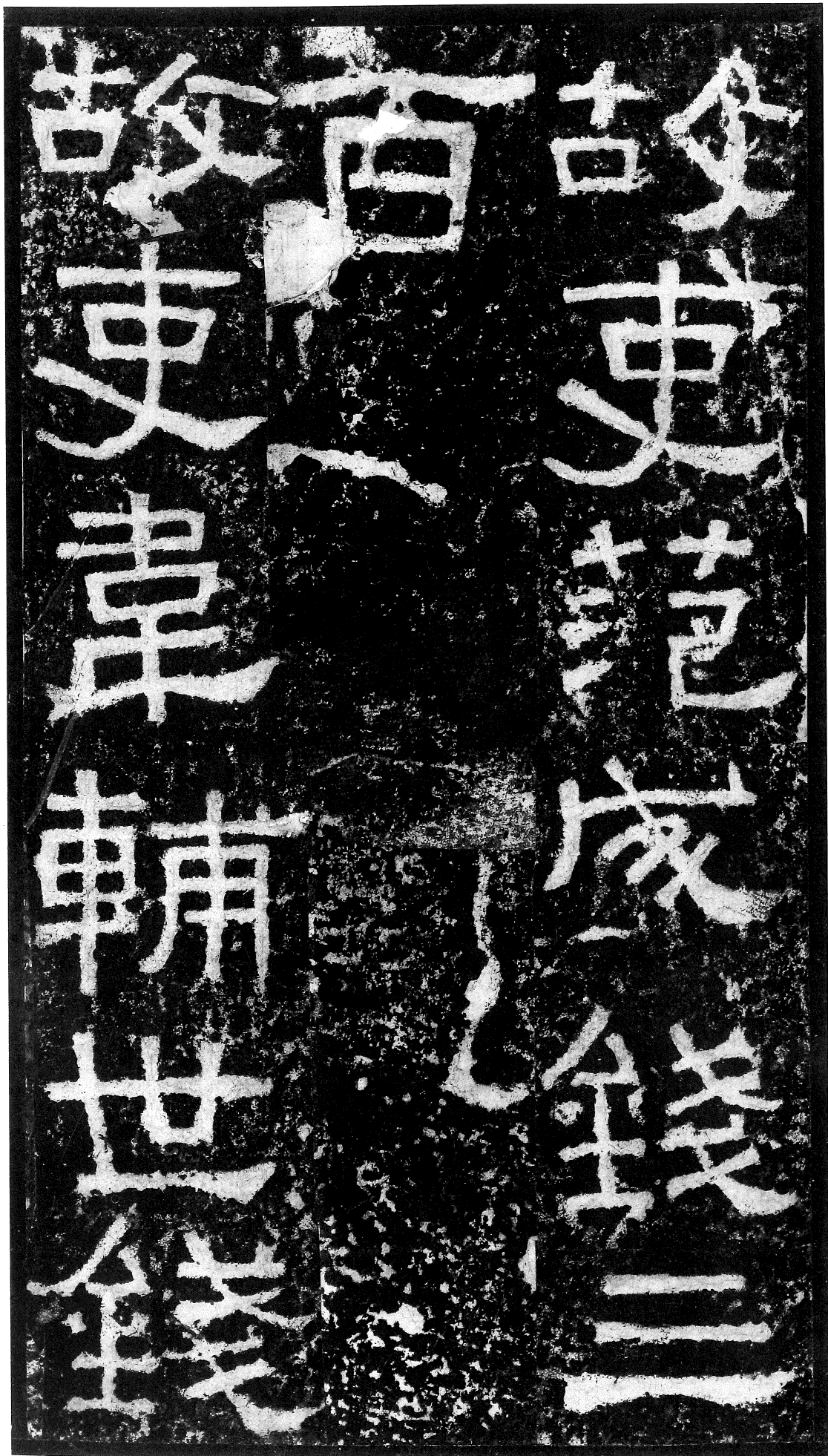
四百。故吏韋元緒錢四百。
故吏·韋元緒·錢四百。



故吏韋客入錢四百。故從事原宣德。
 故吏・韋客入・錢四百。故從事・原宣德。



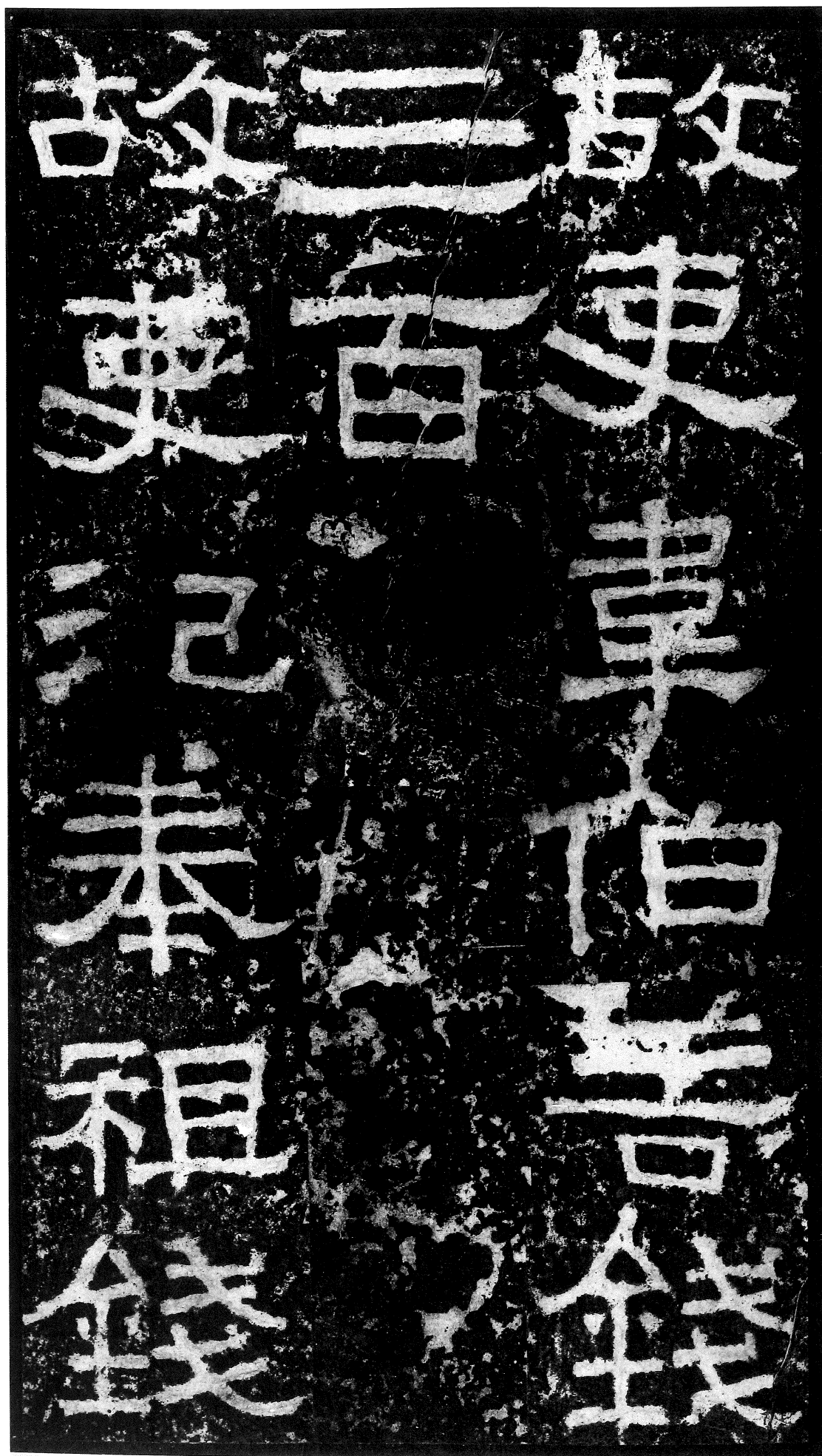
錢三百。故吏章公明錢三百。
 錢三百。故吏·章公明·錢三百。



故吏范成錢三百。故吏韋輔世錢三百。
 故吏·范成·錢三百。故吏·韋輔世·錢三百。



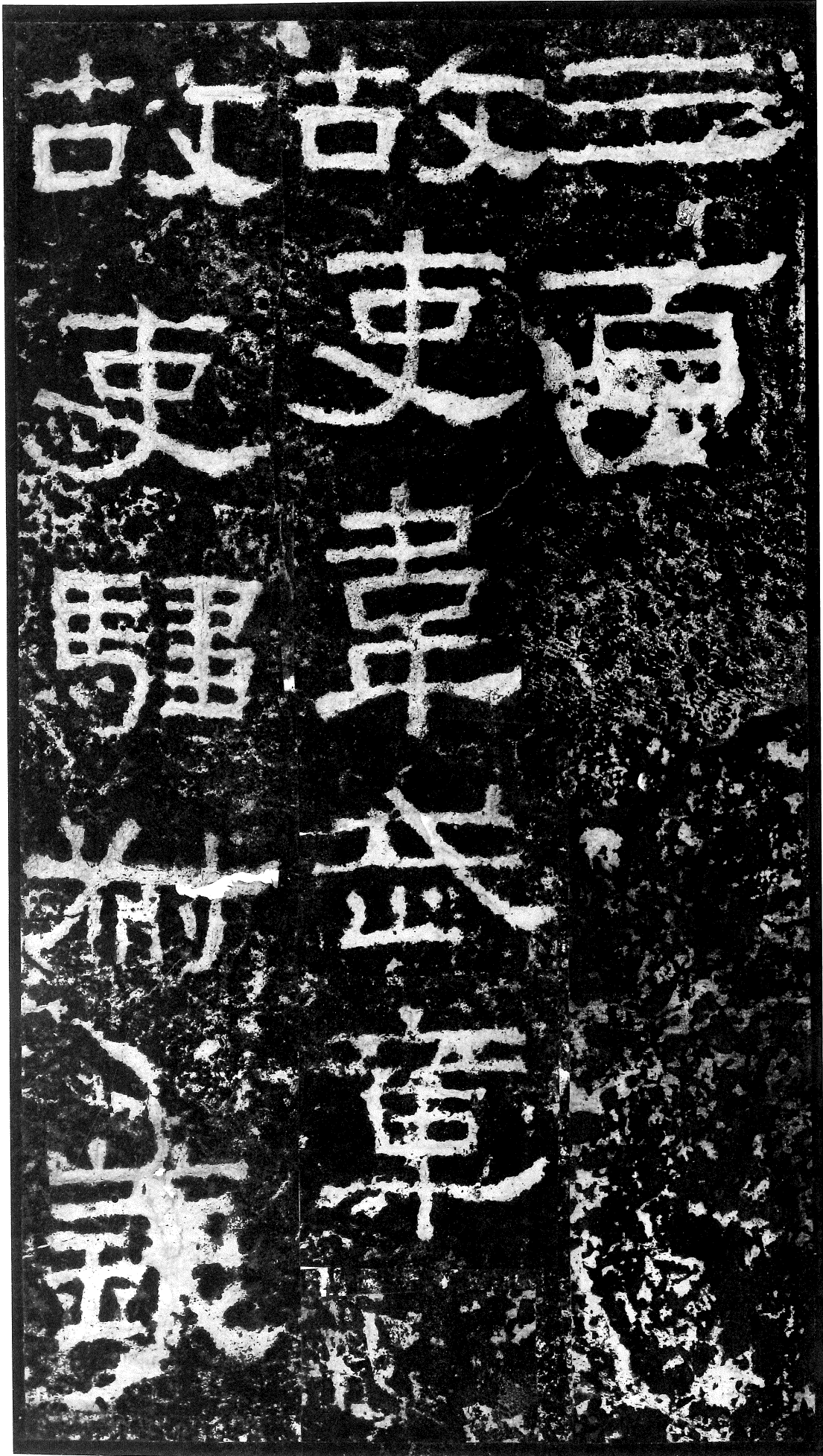
三百。故吏范國方錢三百。
 故吏·范國方·錢三百。



故吏韋伯善錢三百。故吏范奉祖錢
 故吏·韋伯善·錢三百。故吏·范奉祖·錢三百。



三百。故吏韋德榮。故吏范利德錢
 故吏·韋德榮。故吏·范利德·錢(三百)。



三百。故吏韋武章。故吏騶叔義。
 故吏·韋武章。故吏·騶叔義。



故吏韋宣錢三百。故吏韋孟光
 故吏·韋宣·錢三百。故吏·韋孟光·



錢五百。故吏韋孟平錢三百。
 錢五百。故吏·韋孟平·錢三百。



故守令韋元考錢五百。
故守令·韋元考·錢五百。

この碑は、後漢の中平三年（一六六）の作である。著録の初見は、明中期の都穆『金薤琳琅』で、それ以前には記録がない。早くに埋没したためであろう。明初に山東省東平州で出土したらしい記録がある。その後は州学に置かれてあったが、一九六四年、泰安市の岱廟に移され、いまはその炳靈門内の東廡に、後漢の衡方碑や西晋の任城太守孫夫人碑など、漢唐の碑石一八種の一として列置されている。原石は通高三一五×一〇二cm。碑側の左右には、立体像の昇龍が円首の頂上で向かいあう形に彫刻してある。碑首には「漢故穀城長蕩陰令張君表頌」と額題しているが、篆書とも隸書ともつかぬこの書体は、秦の八体中のいわゆる「署書」の流れを汲む珍しいものである。

碑文は一六行、行ごとに四二字。全文で五六六字を入れている。ただ一四行目末の右側に「忝」字がある。いろいろと考証されているが、意図はなおよくわからない。碑陰は三段で、上二段は各一九行、下段は三行。建碑にゆかりの四一名の官職、姓名、釀金額を入れている。この碑は、張遷が任地の穀城（いまの山東省東阿県）から、蕩陰（いまの河南省湯陰県）へ転任するにあたり、吏民が張遷の徳を頌えて建てた、いわゆる「去思碑」であって、歿後に建てる「墓碑」とは異なる。

碑文の用字について、従来から種々の意見がある。中でも清初の顧炎武は、竇を殞、忠を中、暨を既且の二字とするなどの誤りは、古拓から模刻したからだと指摘した。ただこの模刻説に組する人はいない。しかし、他の漢碑にくらべ、誤字や通仮の不適當な字が少なからずある。

この隸書の風は、衡方碑などとともに「方折体」と色わけされ、多くの評家が「端直」「樸茂」と品評するが、漢碑中「古朴雄渾」の代表格とみなされてきた。ただ刻技に行き届かない面があって、その真価が減殺されているため、稚拙で書格が低いと貶すむきもある。しかし近年、張遷碑の出土地とはさほど遠くない河北省武清県で、鮮于璜碑（二室）が出土し、この碑陰の書風が、張遷碑ときわめて近いところから、これはこれで、隸書のいくつかの様式中の一脈流を示す作であることが明らかになった。

この碑の最旧拓本は、二玄社・原色法帖選のいわゆる「東里潤色」未損の明初拓である。本書の底本（翁綬祺旧蔵）は、道光以降の稍旧拓本に当たるが、剗過の跡もなくまた填臘や入墨もない。瘦身ではあるが得がたい精拓本である。